

## 戸田貞三著『家族構成』

叢書名著の復興12

新泉社 46版：17+404 pp.

本書は、もともと1937年に弘文堂から出版されたものであるが、このたび喜多野清一教授の解説を得て新泉社の叢書名著の復興の1冊として出版された。

本書の構成は、著者の家族結合論を展開している第1章、家族の集団的特質と、大正9年(1920年)の国勢調査1,000分の1抽出に基いて考察された第2章、わが国の家族構成の2章からなっている。本書についての書評・紹介等はすでにいくつかなされているので、ここでは翻刻の現代的意義を著者の家族結合論(第1章)の紹介を兼ねて述べてみようと思う。

まず、著者は家族生活の研究には家族の内部構造の研究と家族と外社会との関係を攻究する方面との二大部門があるとし、従来あまり検討されなかった前者の家族の集団的特質(家族結合論)に力点をあてて論じているところに特徴があるといえよう。著者は家族を「夫婦および親子関係にある者を中心とする比較的少数の近親者が感情的に緊密に融合する共産的共同であるといわれ得る。構成上からいうならば、家族は夫婦関係にある特定の異性、ならびに血縁的に最も接近している親子を主たる成員とする少数近親者の集団であり、結合の性質からいうならば、それは少数成員の感情的要求にもとづく緊密なる共同であり、さらにその主たる機能について観るならば、成員の生活要求に安定を与える連帯的關係であり、共産的關係である」とする。この様に、家族が成員の資格制限(夫妻、親子およびその近親者等の少数者)をするのは、家族結合の特質が感情融合の程度を異にする者を出来るだけ排除しようとするからである。即ち、感情融合がもっとも促進され易いのは、この資格制限された成員間なのである。したがって歴史的・社会的条件によって様々な家族形態が存在するが、家族は構造上、常に小家族結合(形態上から見れば核家族)に傾斜する内部的契機を包含しているといえよう。勿論、家族も外社会の変化に対応して変化しているわけであるが、外社会の変化に対応し得る家族の内部構造を先ず把握しておかなければならない。著者の家族結合論はなによりもこの点を強調しているのである。

この点で、近年の核家族化に伴う諸問題の平面的理解にとどまらないためにも、また「農民生活の矛盾の家族における表現としてとらえられるのが、「出稼ぎ」のもたらす問題であろう。これは、農家における生産過程が自家農業経営のみによって完結できなくなり、その結果、世帯主・あとつぎなどの基幹的な農業従事者が、長期間にわたって家をはなれて生産過程に従事するという形をとるものである。……毎年出稼に出る家では、1年の半分は、世帯主・あとつぎなどを家族の中から欠いているわけであり、いわば半欠損状態をつくりだしていることを指摘せねばならない。これが、現代日本の農民の階級的な性格によって規定された、農民収奪ないし矛盾の深刻な表現形態であることはいままでもない。生活構造を動かす要因としての生活目標の昂揚が、生活単位としての家族の構造そのものを空洞化させているわけである」(蓮見音彦『現代農村の社会理論』、時潮社、1970、pp. 96~97)といったきわめて現代的現象の考察にとっても、戸田貞三氏の家族結合論は、読み直さるべきであり、また、この時点での翻刻の意義もそこにあると言ってよからう。

(清水 浩昭)